

鐘ヶ岬

和歌山県日高郡の古刹である道成寺には、安珍と清姫にまつわる伝説が残っています。これは、紀伊国日高郡に住む真那古庄司の娘の清姫が、宿を借りた熊野修験の僧の安珍に恋をし、夫婦となる約束を交わしました。ところが、安珍は約束を反故にして、立ち去ってしまいました。その心変りを恨んだ清姫は、嫉妬の末、安珍の後を追う内、ついには蛇体となり、安珍が身を隠した道成寺の鐘に巻き付き、安珍を鐘ごと焼き殺し、自らも息絶えてしまうというものです。

平安時代の半ばに書かれた仏教説話集の「大日本国法華験記」や、平安後期に成立した説話集の「今昔物語集」にも同種の説話があります。これらは、元々、嫉妬を戒めるものでしたが、時代の経過と共に、乙女の恋と妄執という物語として捉えられるようになり、芸能における格好の題材となりました。その代表的な作品が謡曲の『道成寺』です。この安珍清姫の伝説の後日譚として成立した曲は、歌舞伎をはじめとする他の芸能に大きな影響を及ぼし、これを素材にした「道成寺物」と呼ばれる一系統をも生み出すに至りました。中でも、宝暦3年（1753）3月、江戸中村座において初世中村富十郎が初演した『京鹿子娘道成寺』は、その決定版と称されて今日も上演を重ねています。長唄によるその歌舞伎舞踊の人気曲の詞章を用いて成立したのが『鐘ヶ岬』です。

宝暦9年（1759）、大坂の角の芝居で上演された『九州釣鐘岬』という芝居の中で、初世富十郎は、自らが初演して大当りを取った『娘道成寺』を上方唄を用いて再演しました。この時の地が残り、地歌の『鐘ヶ岬』として、繰り返し上演されています。

「鐘に恨みは数々ござる」から始まり、謡曲の『三井寺』の「鐘の段」を引用した格調高い詞章により、清姫の鐘への恨みをしつとりと描き出します。「言はず語らず我が心」からは、乙女のままならぬ恋と思いを表出します。これに続いて、合の手で見せる手毬を突く振りが見どころとなります。さらに、「恋の分け里」からは、諸国の廓の名を巧みに読み込んだ廓尽くしの詞章に合わせ、本曲中で最も華やかな雰囲気醸し出す舞となります。やがて、徐々に清姫の心へと戻り、執念を抱きつつ鐘を見上げて舞となります。そして、艶やかな美しさとしつとりとした風情を保ちながら、恋をする女心を描く印象的な幕切れとなります。